

春雨物語「血かたびら」と日本書紀

堺 光 一

秋成が日本の史書に傾倒していたことは、その「史論」、金砂刺言、古葉刺言、金砂、檜の柚等を見れば認められるところであり、また国学の道にいそしんだ学歴より眺めても判るのである。殊に日本書紀と秋成との関係は文化元年正月、秋成七十一歳の時に成った金砂刺言に「日本紀の古巻と云を一覽せし」と述べて、関心のあることを示している。

また寛政四年十一月、秋成五十九歳の時に成った安々言において、本居宣長が古事記を推重するのを罵倒して、「近世皇那云学道大に開け、復古の業を興立し、唯一兩部の古学ならぬを排斥し、幽を採り、互に釣る士、都鄙に競ひて出づ、時に一老学宣（長を指す）有て、稗田口碑の古事記を擧出、日本紀を推排き、一家を与立為んとす、寔に彼書（古事記）は伝説の殊に幽怪なる兇蒙の嬉談に似る者が多く、」と述べて、復古主義に立つ国学者が日本書紀を排して古事記を重じて一家を立てようとしているが、その当の古事記は幽怪な嬉談が多いといっているのである。その反面、日本書紀を尊重論すべきことをして、「崇道尽敬神皇の日本書紀に暨て、其本文を以て正説と定め、其他不可措者、一書と為て所載、当時の会

議論定見つべし、而後朝廷世々講筵に、是を古伝の正説と仰ぎたまはんこと、他不可有者也」と主張して、日本書紀が会議によって論定した古伝の正説であることを極めて力説しているのである。考えてみれば秋成はこの安々言の発表によって日本書紀推重説の先声をなしたのであって、秋成は古事記を否定し、日本書紀を肯定した国学者であり、それについて高見一見識をもっていたのである。

このように秋成と日本書紀との関係には極めて緊密なものがある。秋成の最晩年の文学作品、春雨物語「血かたびら」と日本書紀との関係を見ると、「血かたびら」に平城天皇の考えとして、「皇祖尊、矛とりて道ひらかせ、弓箭みとらして仇うちしたまふより、十つぎの崇神の御時までは、しるすに事なかりしにや、養老の紀に見る所無し」。(傍点筆者)と述べている。これはこの一篇の製作にあたって、元正天皇の御代、養老の時代に撰ばれた官撰史日本書紀を参照したことを示すものであって、「血かたびら」の創作にあたって日本書紀が典拠として用いられたことが認められる。

殊にその中の一節、仁徳天皇と、菟道稚子との皇位相讓の事蹟を叙した「血かたびら」の一節が日本書紀にその原拠を持つ事は疑は

れないのである。すなわち日本書紀卷十一、大鷦鷯天皇(仁徳天皇)の条に「蒼田天皇崩時太子菟道稚子讓位于大鷦鷯尊、未即帝位、披露大鷦鷯尊、夫君天下以治万民者、蓋文如天。容之如地、上有驍心、以使万使百姓欣然。天下安矣。今我也弟之。且文獻不足、何敢繼嗣位、登天業乎。(中略)大鷦鷯尊对言。先皇謂、皇位義一日不可空、……我雖不賢、豈葉先帝之命、輒從弟王之願乎、固辭不承。(新訂増補国史大系第一卷二百八十九頁、二百九十頁、九十三頁)とする。このところは「血かたびら」の「かしこ(浪速)に都あらせし帝、(仁徳帝)御父(応神帝)の弟御子(菟道稚子)を立て日嗣と定たまひしかば神去給ひて、兄み子もたゞ宇治につかふまつり玉ふを、兎遲のみ子は、我兄に譲て登極せん事、聖の道にあらずとて、譲りたまへど、否、既に日継のみ子とは、君を定たまひしぞとて、三とせまで相譲りて御座むなし云々」。(富岡本春雨物語岩波文庫十四頁)と交渉があつて、日本書紀の長文を簡潔な文章に改めて居るのである。殊に日本書紀の同条の「各相讓之。爰皇位空之既經三載」(同国史大系二百九十頁、二百九十三頁)は、「血かたびら」の「三とせまで相譲りて御座空し」と字句に於ても一致するのである。また日本書紀の同条で「太子日、我知不可奪兄王之志。豈久生之煩天下乎乃自死焉。(同上)は「血かたびら」の、「弟皇子ついに刃にふして世をさらせしとぞ」(春雨物語岩波文庫十五頁)と、一致し、共に弟皇子自及の事を記して共通な関係がある。また日本書紀の同じ条で、「時有海人。賽鮮魚之苞直獻于菟道宮也。太子命海人曰。我非天皇。及返之令進難波大鷦鷯尊亦返以令獻菟道於是海人之

苞直獻於往還」(日本書紀同上)とあるのを「血かたびら」の、「難波の蟹等貢く真魚は、をちちさまよひて、道にくされしとぞ……」(同春雨物語同十五頁)に比較すると「難波」の地名や「蟹」於往還」と「道にくされし」との詞句の共通は、両文の間に直接交渉があつたことも明かにする。

ところで、この仁徳天皇の菟道稚子の故事は日本書紀ばかりでなく古事記にもあらわれている。この点について秋成が早く「賜撰津国西成郡今宮庄弘安之勅書并代々之牒文序」に「日本紀古事記等しし奉りて、つばらかなるもとせの貢を止めさせて民草榮えぬる……此浦の蟹等して奉らしめ給ふ。」と言っている通りである。そこで、日本書紀と古事記と何れが「血かたびら」に直接関係があつたのであるかというに、私は日本書紀を秋成の典拠とみなしたものである。何となれば、「血かたびら」と文章詞句の上において一致するのは、古事記でなくて日本書紀であるからである。すなわち、古事記には、「是に大雀命と宇遲能和紀郎子と二柱、天下を各譲りたまふに、海人い大贄を貢りき。爾兄は辞みて弟に貢らしめたまひ、弟はまた兄に貢らしめて相譲りたまふ間に、既に多日経ぬ。如此相譲りたまふこと一、二時に非りければ、海人は既に往還に疲れて泣きけり。故諺に、海人なれや己が物から泣くとぞ曰ふ。然るに宅遲能和紀郎子は、早く崩りましぬ。」(古事記、岩波文庫百三十九頁)とあるところが、「血かたびら」には「三とせまで相譲りて、御座むなし……、弟み子ついに刃にふして世を去らせし……、道にくされたり」と見えていて、これ等のものは、古事記には類似がなく日本書紀には類似点があるのである。